

ことば

菅沼美代子

夏の雨のはじめの

一滴のように

混じりけのない

透明で低い体温の水滴

はじまりの

ばらっという微かな音が

けしきをかえる

それが驟雨にかわっても

篠突く雨に 打ちのめされても



だれも気づかないで
ことがらは起きていて
知らぬ間にできごとが
周知されるという運びに
馴らされてはいけない わたくしたちは

—こんな馬鹿な戦争で死にたくないと思った
老人は ぼそっとつぶやく
—生きていることは幸運ですあの死体の山は
ずっと忘れられません
老婆は 滾る想いを静めて話す

よくはたらく眼で
ねむらないで聴き
しずかな魂で
めいりょうに伝える ことができる？

上がろうとしている
雨のさいごを視ていると
すでに移ろい惑う間に

ぶふっという秋のような音がした

どこにでも行けそうに

浮かんでるのに

消えてしまうかもしれない

一筋の白い雲